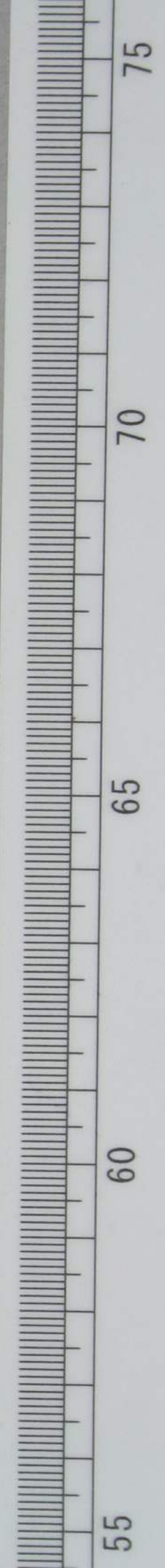


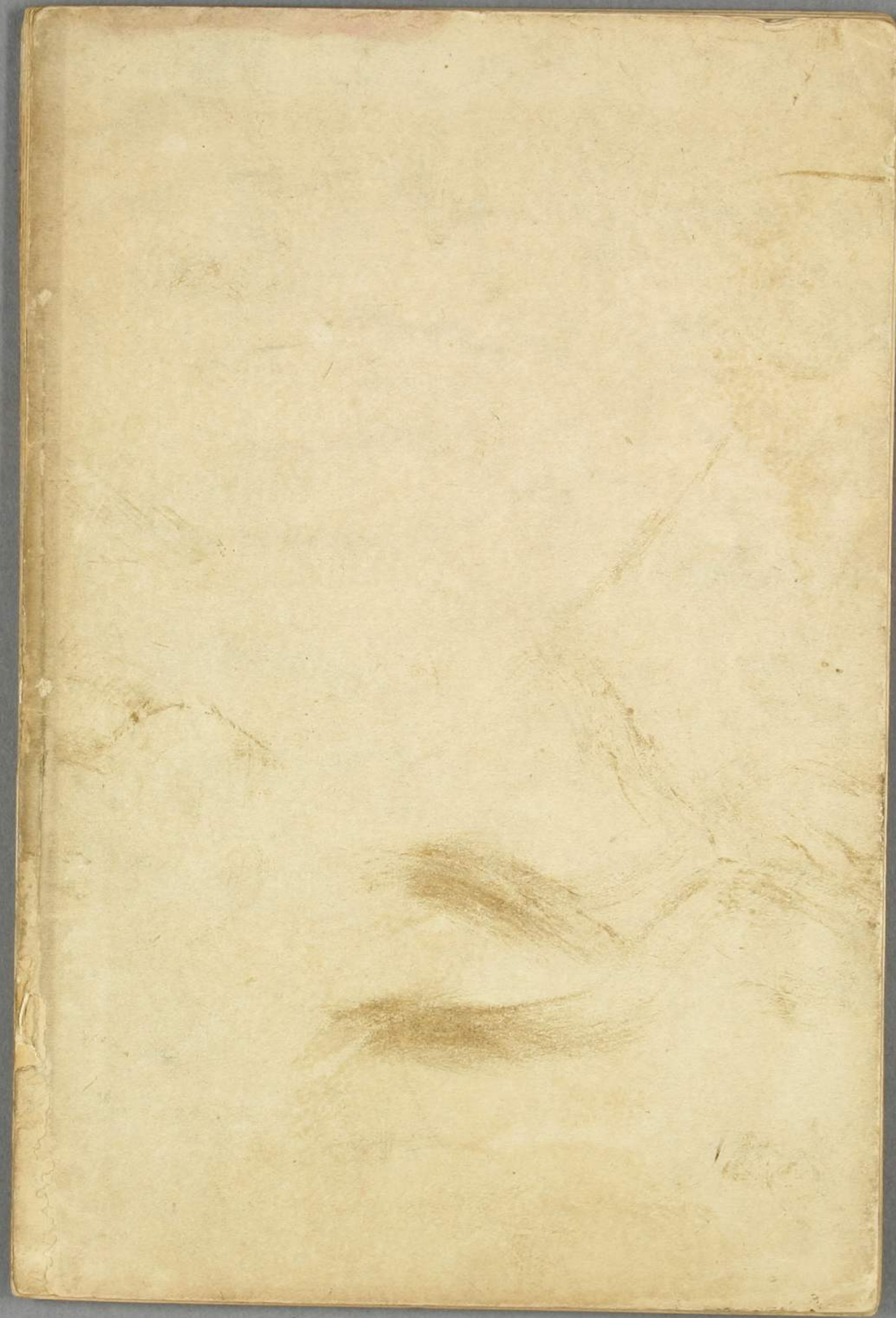


大和堂
建樹作

本問文庫
文庫 14
D 90





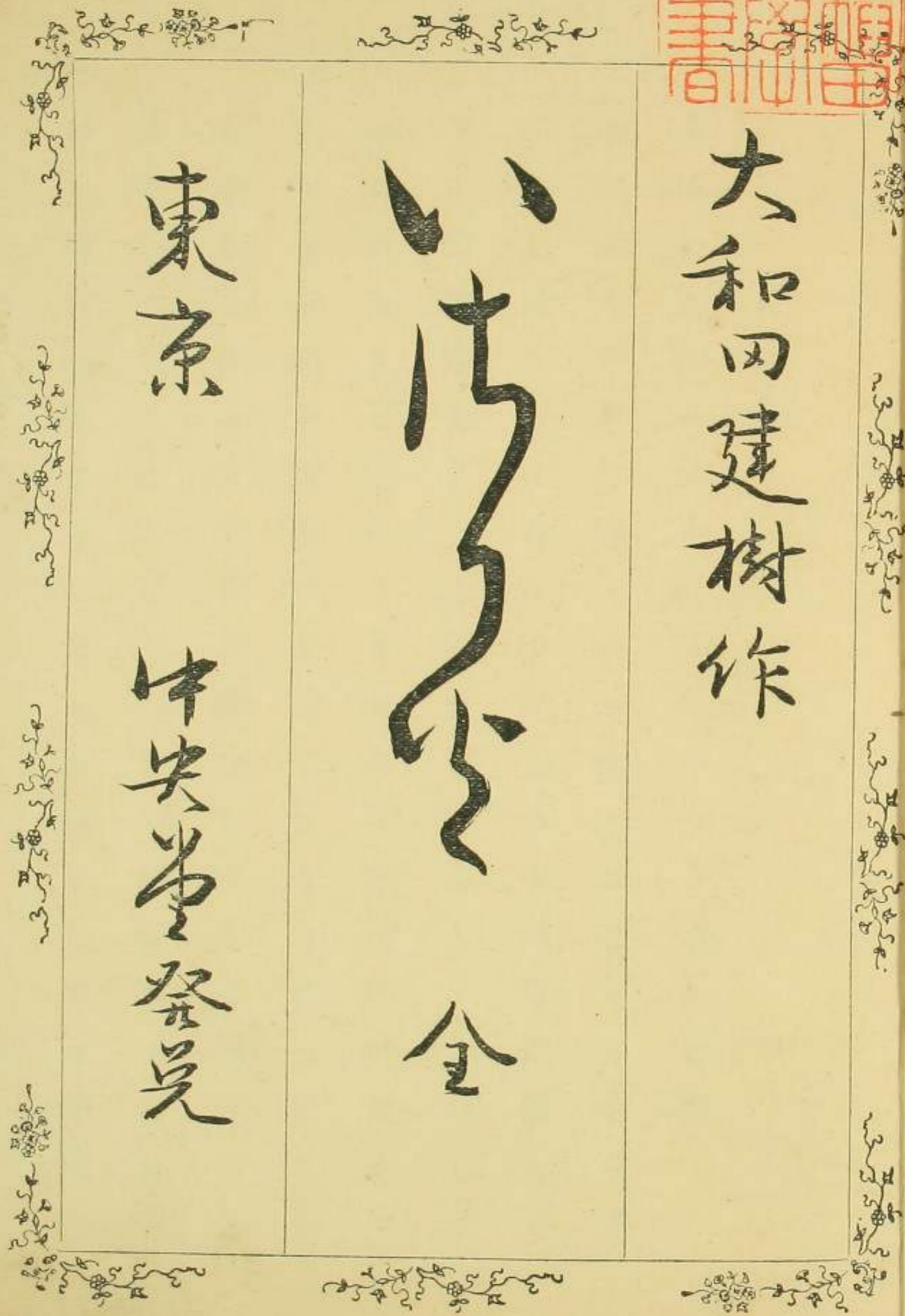




大和四建樹作

心法心全

東京 中央堂祭具



自序

今はむろし、わが十三比年かりき、始をて歌つくり試みて、穴戸千建といふ老人ふ見せたるを、老人より父に告げられて、武士のすべき武藝もせず、公卿方をきたる遊びをするとして、さびしく叱らきたることあり、またその頃、詩語碎金がほしきといふを許されざりし、こぞも何りけり、かくゆるされぬ道をまむ、書籍も師匠も得ることあたはず、ある時は百人一首の頭書をそらんじ、ある時の神社にまうで、繪馬にしろせる歌を

自序



二
讀みおぼえなどいつ、ひそかお學びし年月を
おもへば、茫然として夢のやうあり、いまこれ小
冊子を公しせんやて草稿ふか、れば、歌書の自
由ふかたはらゝ積まれてむつましく詞をかは
し、父の笑顔よく隔てぬ燈火の影もかたまり、う
れいさよつけても恥づかしき、童ごゝろは豫
想せし十が一つの上手も至りぬることよ、
十五の年の春ふやありけん、
するほゝ、硯
の墨のあくおれど成らぬ言葉の道どかなしき
と、詠ぜしをりもありしを、さりとて思ひすてお

んの目志あらねば、ひろく世の批判をえてぞ
改むべきは改め研ぐべしはみが、んとて、をこ
がましくも自らすゝみゆでたるのみ、わき既ふ
一人の師なし、あゝ万人に師をえんことをこそ

明治廿一年十二月

大和田建樹
しるす

自序

三

おどりの花	夕れ空	山里よて	瀧	ほたる草	歸郷の前	おでしこ	海邊の歌	人まつほど	あゝみどり	別れーあと	籠の鳥	海あなた	春の夜	少女の望
.....
二十九丁	二十七丁	二十五丁	二十三丁	二十一丁	十六丁	十五丁	十二丁	十一丁	十八丁	八丁	六丁	四丁	二丁	一丁

目録

○

秋のかたみ	三十三丁
夕雲	三十四丁
あらき	三十六丁
かたみの琴	三十九丁
千鳥	四十一丁
かへらぬ影	四十三丁
少女の死	四十五丁
冬の月	四十七丁
春の歌(四首)	五十二丁
夏の歌(二首)	五十三丁
秋の歌(五首)	五十四丁
冬の歌(二首)	五十六丁
雑の歌(四首)	五十六丁
小兒の病み居ける頃(二首)	五十八丁
旅日記の中よる(五首)	五十八丁

少女れ望

うつくしきその望のぞみ
 花の蒼をあらわして
 少女の胸ふ笑みそめぬ
 雨も嵐もけさいぬあゝ
 少女の胸ふ笑みそめぬ
 色香をほえる愛の友

うつくしきその望のぞみ
 眉あたらしき三日月つきを
 夕暮ごとよまさりゆく
 かをむ頼たのむよのゝやきぬ

少女れ望

影に未来を照らいつ、

うつくしたそれ望
雲雀の羽をうらひろげ
むのふよ空に海原よ

下りえ上りも海だ知らぬ
かなるよ小星のほの見えそ

春れ夜

春風さむくそよふけて
火影また、く窓のもと

とまゐるむせう
机よよりて離れぬ姿

何、いつのまふ戀人は
己が歌さ、よ来りしか

けしき身ふしむ朧夜よ
ふるそ霞か去ら雪か

ほろとちらり
軒端ふ近くひらえく影

せもよ舞えん戀人の
今宵何くが来りしか

春れ夜

棺はかれて更け己ある

月よすそゆく鐘れ聲

人のゆづこ

歌へばかはを水れ間の調

何、戀人の

ちる花の
まごり踏まんを訪ひ来しか

海れ何あそ

いさり火遠く見えを免て

沖よりよまる暮の色

なかば夢路をすぎざりし

たびは月日もいま幾日か

あ、戀し海の何あそ

親子うちつぎ岩かげを

おくれを歸る海士小舟

あすの日和の外にまた

ものおえむなき生涯や

あ、戀し雲れあそた

こ、ろ千里の旅びを

ゆつまで吹くか春れ風

寐らさぬ夜の友として

海れあそた

籠弦鳥

有明月のかげき江て

まどはやうく白みゆく

草のまくらを起きはなま

空ふうたはん時はいま

いさむ翼をいかにせん

雲よ入るべたみちた江ぬ

まくらをたたく波の聲

あゝ戀の家なるひと

朝日はいまもふるさの

すみれの露野邊より野邊を色どりて

友の羽がひを照らすらん

眼が危はてなき天れ原

神れあたへし庭あるを

聲もせゞぬ我戀ひて

戀しやあまし水の音か母の草かげに

歌ひの外まかほえあ死

あけき夢みぬさきあらば

籠の鳥

火 土 土 水

君がひたひたひ
 夕日れ雲のあほ何れよ
 語るともなくうちつれて
 やすみいあの木蔭
 水鏡してもほ望もよ
 あたえいの何の小川
 わかれし君よわが胸を
 は照進ぬ影のあほ何れよ
 うぐむすの飛び去りぬ
 こゝろよつゝく歌れ聲
 かがまふれこる波れ花
 別是去何と
 九

火 り さ 水

春風の吹きすぎぬ
 別是去何と
 あはれ慈悲ある少女よ
 親子れ情の已進れみか
 いほのおよばぬよそれ空
 うらやましき春風
 あれおぞみゆる空ごしお
 野寺の塔のくもかきみ
 囚れわが身いつまでぞ
 八

三

誰が琴のしらべかまじる
わか緑おほふ木蔭を

はしりくる水もあつかい
花つみよあひし少女の

面影のいまもみゆるを
まぼろしよ今も浮ぶを

春かへり梢あがりて
人とほく里へだりぬ

あはきその吹きくる風よ

言とらん夢とすぎふし
春のゆくへを

人まほ不ど

村雨のはきゆくそらよ

ほやゝぎす一聲なきつ

橋のはなちるかたよ
よついつ、螢ともいぬ

心ゆく夜よもあるかか
契りおきし人待つ不どの

つきぐをぬぐさ免がてら

人ほほ不ど

庵いほの外とれ畔あぜみちづたひ
若わがゆけは松まつの葉はごーよ
月つきもれぼりぬ
苔こけ清水しみづむをびて来こんぞ

海邊れ歌

をどれ波あみ
自然まぜんの鼓つづみうちつきて
疲つかまぬ拍子ひょうしふみつきて
ゆぎとびこえよわが上うへを
濤うくも沈しづむもたゞよ

うとよ波あみ
うちてくだけて捲まきりへる
すはく来くるぞ又また一ひとつ身みをまかせて
力ちからのまきはやく
負まけど岩いほ根ねよ身みをまかせて

かへれ波あみ
人ひと影かげもあまそらのうみ
洗あらひはてゝ又また磯いそよ
おつる雷いかづちちるあられ
波あみかわが身みか神かみの手てか

海邊の歌

火りそは

わ	汝	い	あ	よ	よ
の	が	つ	お	せ	せ
ふ	懐	ま	や	く	よ
の	よ	で	吞	る	波
恐	身	も	ま	雪	
け	を		ま	の	
ふ	よ		て	遠	
の	せ		か	山	
愛	ん		ら	口	
の	ん		裂	裂	
汝	く		け	て	
が	待		て	吹	
こ	て		ゆ	る	
ろ	よ		の	う	
	波		ち	ち	
				聲	

火りさは

去	起	ち	白	少	あ
りが	さ	か	露	女	で
が	か	へ	を	子	ま
て	へ	り	を	が	ま
ふ	り	あ	み	朝	ま
花	あ	ぐ	だ	ふ	ま
の	る	る	と	む	ま
何	面	涙	う	庭	ま
たり	己	う	け	よ	
を	の	ち	て	ひ	
	か	は	に	ら	
	似	ら	か	な	
	た	い	似	で	
	る	せ	た	し	
		て	る	こ	

鳴る

火りきり

○ 歸郷れ前

わが屋をかほふ
 椎一本
 ながきお垂きて
 晝さむく
 手銅の犬れ
 水飲み
 下りゆく
 姿はや失せぬ
 あゝこひし
 そのあたり

とぶ蝶よ
 づれに花の
 品定する

火りきり

董つ

みていやすみたる

の兎岩

かいらぬ愛よわが友よ

これぞ心よ消えぬ影

いざいかん

ふるさとよ

しむし小川よ浴ひゆけ

松原盡きてまへに海

魚とる舟もあがむべし

干潟の貝もひろふべし

歸郷れ前

父^{ちち}をたすけて夕^{ゆふ}ごとよ
 このごろ暇^{ひま}らんその盛^{さか}たる朝^{あさ}顔^{がほ}も
 あすの笑^え顔^{がほ}をけふの夢^{ゆめ}
 あゝこひい
 あゝこのし
 あゝたのし
 そのけしき

よみてくらそん母^{はは}上の^{うへ}の
 軒^{のき}端^はの鈴^{すず}をきゝあがら
 このませたまふ小説^{せうせつ}を
 何^{なに}ゝたのし
 采^{さい}んつきひ
 夕^{ゆふ}やけ雲^{ぐも}のそらたかく
 かへる鳥^{からと}の三^{さん}つゆつゝ
 何^{なに}れと見^み上^あげて指^{さし}さしゝ
 いもと今年^{ことし}はや七^{なな}つ
 いざきかかん

そのこゑを

あとふりむけ
送り来し

湊のきしのふる柳
御顔のかくれたる

うらみ忘きてあすの
見ん

あゝうれし
あゝたのし

耳みみは
おれたる里さと謡うたの
ひひくあ
おたぞ叔母おぢいの門かど

そよぐ青田あおたの波間なみより
はやあらわれよ招まねく手ては

あゝこひし
いざいなん

ほたる草(月草ともいふ)

晴はれあ
あるみ
そらの色いろよ

装よそひして
たてる
をと
免まぬよ

谷川たにがはの
くさむがく
きよ
見え
かく
きか
びく
姿すがたよ

ほたる草

香かにふほひ時ときをくはなを
 よそふ見みて垂たれふす眼まなこよ
 ゆく水みづふ裾すそをひたして
 涼すずしげふうち笑わらむさまよ
 里さとの子こがほたとよびて
 うつくしむ少女せうにょど汝おれ口
 歌うた人びとの月つきとあづけて
 えてはやすをとをぞ汝おれ口
 ねくりけん
 朝あさ霧きりの手てづからかけし
 露つゆの白しろ玉たま

解ときみだししさらせる布ぬのよ
 かせよ掛かけ縁いを引ひく糸いとよ
 やまひをのこ、や機はた殿どの
 への簾すだれぞおろす
 ちかばより谷たに口くち絶たたきて
 ふかみどり影かげもうつらす
 汝おれひせり
 世ようつくしき
 ものいありけり

瀧

瀧

山口裂け岩いんのひづめのひゞき

吹きおろすまつあが上うへを今いまも打うつか

汝あなが路みちはふるれば消き江えて

汝あなひとりものゝちよさ

白雲しらぐものそらよりおちて
うたふ聲こゑつゞみうつ聲こゑ

この山やまをつくりし神かみの

流行はるゆく手てもさほらぬ調しらべ

あめつちの板いたはど合あはす

汝あなひをり
世よは心こゝろたかさ
ものゝありけり

山里ふと

みどりしたゝる軒のきの山やま

山里にて

朝日あさひをそらよ躍たどらせて
變化へんかつねふさままどの雲くも

造化ぞうかの腕うでわがこゝろ
とらへてこゝよはや幾日いくか

目めざむる乳ち兒この枕まくらふり
柳やなぎのまはすかざぐるま

やねふともとぶ山やま鳩はとも
馴なれての言葉ことばかひすらん

効心きしんよもえそむる

造化ぞうかの愛あいはやくへ

薄うすの波なみの穂ほがくまよ

浮うき沈しづみまる女を郎か花べし

たゞうちまねく夕ゆふ風かぜの

袖そでさほくの野の邊への秋あき

垣根かきねづたひようかれ来きて
あとみかへまの妻つまも子こも

夕ゆふれ空そら

うつくしの空そらの色いろ

夕ゆふの空そら

羽をひろげて
入日のあとよく
誰がかもかげを
あ、あ、戀し人

おもしろの空のさま

色いやうく消えゆきて

ちぎまちぎま散る雲の

とばりをのどく月の顔

あ、あ、戀し人

あつかいの雁の影

友うちつきてあの空を

こゝろの海、ふ渡るぞや

自在のつばさ樂しき身

あ、あ、戀し人

なごまはれ花

黄むみゆく草をちからよ
なほたのむ朝顔何れ

色うすく身も瘦せがれて
さきのこる一花あけ

なごまはれ花

のぼる日ひの花はなふむあへど

老たひはてし秋あきのかきねを顔かほもそむけず

いまもかほ杖つゑとぞたのむ

咲さきそをし汝おが世よの始はじ

同胞どうぱうもとも、か、らんを誰たれおもひきや

たすけなき一ひと花はなあひま

有明ありあけのつきのしづくを

身みふかふる玉たまをよそ布ふひ

川かくろいぬ笑顔えがよを、げて

世よは立ちし朝あさをありしを

吹ふたある、夜半よはの嵐あらしは

やぶられぬ花はな笠がさみせてその夢ゆめのよしやぶれても

ほこり川がる朝あさも何なにりしを

たよりつる薄うすいあふま

あたりみし小蝶こての失うせぬ

時々ときは落おつる水みづの葉はも

なごまれば花

身をうちてよそよど過ぐる

敵と見し日のひかりさへ

親と見しきのふの露の命となるよ

身をころを霜せのり

あわれその花のみあし兒

あわれその榮花のちどり

さきだつも残るもあばし
いざねむき神のたまへる

土れまくらよ

秋弦あつと

童子ら掃ひぬ捨てそ

あが門あつもる紅葉は

秋風のおきつるあどり

霜の上を照らす日かげよ

ぬきかへる色もうつくし

少女子ら流しを遣りそ

秋れかあみ

消えぬ間の霞をのせて

いざや子らはしり舞ふさまもおもしろ

こゝまつどひて

拾ひ来し落栗やきて

しばらくの秋をかめよ

あづかなるわが山里の

秋れおごりを

夕雲

くちなしの

裾うちかけて山の端よ

しむし休らふ黄昏は

浮世の戀れおもかげを

あつゑて畫く己が姿

獅子舞ひ

龍をわたふし神れゆく

あらしおあとの青空に

かゝる命のおもしろさ

あらしおの

山をなかばのうす紅葉

かふみふおきていざいあん

夕雲

わが故^{ふる}跡^{あと}の霧^{きり}のおく
鹿^{しか}の音^ねとほく響^{ひび}くかた

あられ

芝^{しよ}生^かは落ち^たてはしりまふ
玉^{たま}霰^{あられ}

ふきく白^{しろ}くつゑるまで
あさはや色^{いろ}はきえ失^うせぬ

すぎし名^{めい}譽^よの花^{はな}に似^にて

たゞよむうかぶ池^{いけ}水^{みづ}の

落^{おち}葉^はふをどる玉^{たま}あられ

いばしとまりてまほ遊^{あそ}べ
あさはや波^{なみ}は消^きえ失^うせぬ
さだをさき世^よのさまに似^にて

おぼろ月^{つき}夜^よはちる花^{はな}の

むろひあつゑて贈^{たく}らん
すがたを見^みせてふる霰^{あられ}

恋^{こひ}しき人のかげに似^にて

空^{そら}ふたゝかひ地^ちはさけび

あられ

勝つも負くるも隔あく
ほろびくだけてふる霞あられ

同じ枕まきえ失せぬ
わかき心の愁は似て

松の末葉をいのちよて

あづりよれこる玉霞たまあられ

くだりしをりの時の聲
ゆづこの胸よ眠るらん
まら口あそびの夢ふ似て

あが母のゆづくよゆきし

あが母のいづくにゆきし
手よふきし琴をふすそ、

塵はらふ人もなれば
こゑたえて日の重かりぬ

片言よくりかへしたる

ほゝゑみし母のおもひげ
あが歌を汝もあすきじ

汝が面ふいまもうつれり

かたゑの琴

なつかしき指ゆびひかきて
うごきし口あけまの糸いと

壁かべよ立ちのこれる琴ことよ
汝おれも忘れわすれど

朝あさ夕ゆふよむかひし影かげを
愛あいのひるりを

花はなも散ちき鳥とりもよし行ゆけ
歌うた聲こゑかへせ

月つき白しろし空そらおもいろし
霧きりこそあゝき

春はるも来きぬ山やまもまらひぬ
わが胸むねをこほりぞとけぬ

ゆかよせん母ははなきやどを
いかにせん聲こゑせぬ琴ことを

千鳥

夕ゆふ風かぜふ吹ききけらきて
波なみ間の千鳥ちどり

子この親おやのあと追たむかねて
遠とほ近こゝろよよびかいらん

我われもまた父ちちまぢりねて
遠とほ近こゝろよよびかいらん

五七

火りき 43

かへらぬ影

木の間にほへ種影
 木の間より暮る夕日を
 織り掛くる水の文
 みどり伏す草葉を撰ちて
 置かれ逢ふ波は雪
 おもしろの小川の姿
 忘れんとせれども去らず
 それ色はわが胸ふ
 その声はわが耳よ

四十三

火りき い

磯ちかく立つぞ久しき
 庭よ千鳥あけまの同
 つばきもて父を迎へよ
 朝月夜すがたうつして
 鯛つりよいでたる父の
 夕日影くもにきえても
 かへる来す舟だま見えす
 折返り岩うつなみの
 はら己さに響きて寒
 いづかたよいま津ぶらん
 やよ千鳥わが待つ心

四十二

五七
五七

火りさゆ

少女の死

四十五

一嵐ひとあらしこそすゑふすぎて
 宵よひれ雨あめくもよりおちて
 見みえそ危あやし月つきもかくれぬ
 初はつ花はなのゆろもとゝ危あやす
 少女しょうにょれ死し

追おひ風かぜのふほふど何なにいき
 汝なが時ときのうつくしき
 花はなの香かのちりまじり来きて
 女を郎ら花はなふぢばかま
 おもかげのよそおれど

火りさゆ

四十四

薄うす霧きりふをかば沈しづみて
 こ、かしく色いろづく木き々の塔たか
 わが心こころいままさまふ
 照てり返かへをゆげしき
 見みし夢ゆめのこるなり
 入いり相あひのおゑをしるべふ
 聞きく聲こゑのなほうつと
 語かたひつゝ野の路ぢのかたより
 過くわ去こもかく未み来らいも知しらぬ
 聲こゑ々々よかへる子こよ

あ
お
君きみの
月つきか
花はなか

春はるふかき
さかりの
こして
のぞ
みの
おいて

霞かすみたつ
うみの
あなた
ふ

君きみすむ
とたの
みを
かけて

雲くものみ
ち雁かりの
ゆくへ
も

眺ながえし
もの
を

玉たま章あきも
ゆかぬ
里さとよ

うつ
まぬ
せい
ふの
真まことか

父ちち母ははの
かど
てか
きこ
を

ひとり
ゆく
旅たび路ぢも
かな
し
ひき
と
免あはざり
し

そ
ら
よ
飛とぶ
星ほしと
み
えて
此この世よも
さ
び
し

消きえ
し
づ
む
は
か
お
の
君きみや
何なには
ま
その
影かげ

冬の月

我われは
むか
しの
春はるの
月つき

我われは
ま
きの
ふ
の
秋あきの
月つき

冬の月

火りさゆ

つねふ變かにらぬ影かげなれど
世界せかいをゆつか老たいまけり

白しろ妙たへひろき園そののうち
いづこふ影かげを休やすらへん

そよ吹かく風かせよさそはれて
花はなふあそびおろ夜よの

あふるゝ戀こひをうつたふる
少女をとめの歌うたもさゝつるふ

ゆふべの窓まどに讀よみのこす
それ玉たま章ぶさも我われの見みし

時とき々々あぐるゑみれ眉まゆ
へだてぬ影かげに我われの見みし

寵おほお望ぞろふる庭にほの菊きく
そのさかりをも我われの見みし

馴なまて訪まひよる高たか殿どのの
何なにありま琴ことの音ねも絶た江えて

ひとり時ときめくともし火ひの
ねやもる光ひかりほそまゆく

はしる霰あられのうし海うみより
廊りやう下かを免めんぐるさびしさよ

火りさゆ

冬の月

四十九

四十八

堤つゝかの木の間にあらわれて

いたる暦まぐはかくしつゝ向むかふ水の面おも

我われこそまえ氷こほりの底そこふねむれども

歌うたをををむる汝あが胸むねを

麓ふもとよひそぐかりびを

反こ響たまよ吹ふゆるおちかみい何なにどの谷たにの空そら

落おち葉はようづむかけ橋はしを

我われなぐさむる音ね樂がくか嵐あらしをふたりうちをたると

天あまぎる雪ゆきをたゝかひし

うらみも歌うたも知らぬ身みは碎くだけてえ

くまねさ海うみよ光ひかりしづかよらふのみ

我われのあよひの冬ふゆの月つきの影かげなれど

神かみ代のまゝの影かげなれど

冬の月

かすみれ衣きぬ 世界せかいのまたも若わかやがん
高嶺たかねのどかふ立たたん時とき

舞まふつるのつばさは隠かくき顯あらはきて

一ひと峯みねしろきはるのとほ山やま

また

ながきよる芦あしれ古根ふるねをよすがまて
一ひとむら何をむはるのわか草くさ

また

庭鳥にばどりのしづが軒端のきばふときつくる
こゑ何た、かに霞かそむそらかな

また

山やままどれ楓かへてのまら葉はあめみえて
春はるさびしくもあれるころかお

夏のうた

瀬せをはやみ月つきもくだくる谷川たにがはよ
一ひと聲こゑまどるやま布ふせ、ぎを

夏のうた

夕立ゆふだちのあらひすてゐる青あをぞらよ
涼すずしくのこる富士ふじのたかやま

秋あきのうた

秋風あきかぜよ吹ふきよせらきてはねき洲その
芦間あしまをひとつゆくわたるかを

また

すすれゆく波なみの日影ひかげはかたをせて
一ひとまぢわたるあきれゆふ風かぜ

また

秋風あきかぜよまかせはてたるわがよはひ
おぼるゝ種たねの数かずもさだめず

また

あすさかん菊きくのつぼみもかすそひて
雨あめたのもしきゆふぐきれ庭にわ

また

散りちきていまた流ながきゆくもみぢ葉はよ
みぎの夕日ゆふひうかぶまもなし

朝月夜あさづきよ 冬のうた

かれの、尾花霜おぼろふすかり

また

いそでらのともし火ひさむくふくる夜よ

岩いわます波なみのおるばかりして

雑ざつのうた

軒のきちかく流ながる、星ほしのかげあを

ねざめやいかふ遠方とほかたのそら

舟人ふねびとの友ともよまた

みると入江いりえのあめのゆふぐれ

浮うきままた

山やま松まつが枝えだふあき風かぜどふく

風かぜひとりまた

月つきをあるのあろの高殿たかどの

雑ざつのうた

小兒の病を居けるあり

まがひぎよ頭かしらえたせてうちねむる
ちごのおもわのかくも瘦やせける
さとしてまごき、いらぬ幼こ兒ごふ
くすりのほまるおやのくるしさ

旅日記の中を呈

江えれ島しまのもし火ひあをくくれはて、
片瀬かたせはかつる夜よあらしの聲こゑ

折をれかへる波なみをかすめて飛とぶ鳥とりの
また

つむさふさはる島しまかげもあし

また

何なにをこえん箱根はこねの山やまの杉もぎのうへ
かすみてかゝる春はるの夜よのつき

また

谷川たにがわのおとよりほかよ友とももあし
山やままたやまの何なにけくれのそら

また

村雨むらさめの木々きぎうつおやも神かみさびて

旅日記中より

ゆふぐれすごき木曾の山ごえ



明治二十一年十二月二十日印刷
全 年十二月二十一日出版 定價十五錢

編者 大和田 建樹

東京牛込區市ヶ谷仲ノ町四十番地

發行所 東京日本橋區通楹町八番地

印刷者 宮川 保全

發行所 中央堂



高等師範學校教諭 大和田建樹先生
高等師範學校助教諭 奥好義先生 同選

● **明治唱歌 第一集** 定價十二錢 郵税六錢

目錄 新年●春の歌●鳥の歌●春風●暮春●遊歩の庭●學の力●勸學の歌●共に學びし●二月の海路●ふるさと
の山●紀元節●家にいふん●日本男兒●皇國の守●母なき吾屋●故郷の空●別れの歌●千里の友●草苺の歌●け
ふよる友●鏡槽の歌●別れの血しほ●若竹若松●朝雲雀●旅の暮●沖と磯●天長節●クリスマスの歌

● **明治唱歌 第三集** 明治廿二年 五月發行

高等師範學校教諭 大和田建樹先生
高等師範學校助教諭 奥好義先生 同選

● **明治唱歌 幼稚の曲** 定價十錢 郵税四錢
明治廿二年一月一日賣出し

これと獨乙、英吉利の幼稚園唱歌集の内より奥先生の撰べられたる譜に大和田先生の歌
をつけられたる書あり

高等師範學校教諭 大和田建樹先生著

● **いさり火** 定價十五錢 郵税四錢
明治廿二年一月一日賣出し

これの大和田先生が明治唱歌その外の雜誌等にもまだ載せられざる新趣向の近作を
あつめて一冊とせられざる長篇の歌集あり

高等師範學校助教諭與好義先生編

● **進 行 曲** 定價三錢 郵稅二錢

右ハ諸學校ニ於テ生徒ノ運動進行ト爲ス際「オルガン」「ピアノ」「バイオリン」等ト以テ奏スルものあるが未だ此種類ノ書出版ホキニ因リ不便少カクザリシに今此適切ナル樂譜四種ノ撰述アリ其益鮮少カクザルベシ
式部次官從四位勳三等男爵高崎正風先生作歌
式部職樂師兼東京音樂學校教員上眞行先生作曲

● **忠愛將基之盤** 定價金貳錢 郵稅金貳錢
唱歌 明治二十二年一月一日賣出し

洋琴伴奏附

本曲ハ小學兒童ニ忠君愛國ノ志ヲ養ハシムルノ一助トセンガ爲メ男爵高崎正風先生ノ作ラレタル唱歌ニ上眞行君ノ曲譜ヲ附セラレタルモノニシテ昨年七月東京音樂學校ノ演奏會ニ同校生徒諸氏ノ始テ合唱ヲ試ミラレタル一大新曲ナリ今般弊堂作者ノ許可ヲ得テ出版仕候間小學校諸君ハ申スニ及バズ苟モ唱歌ニ志アルノ方々ハ速ニ一部ヲ購求シテ壯快ナル歌詞ト活發ナル曲節トヲ味ヒ玉ヘ

明治二十一年十二月

中央堂主人敬白